



Shibuya Culture Project

編集による文化の創造

— 稀代の編集家・橋本徹 (SUBURBIA) のライフヒストリー —

原 知章

1990年代、渋谷¹を主な震源地として、新たな音楽文化²が発信されていった。その中心人物のひとりが、橋本徹である。橋本はもともと音楽業界人であったわけではなかった。橋本は一音楽ファンであり、そして「編集家」だった。

橋本はその「編集力」³を生かして、渋谷を中心とした文化的ムーヴメントの台風の目となり、その後、日本の音楽シーンに多大な影響を与えることになった⁴。インターネットも

¹ ここでいう「渋谷」の範囲は、渋谷駅を中心としておよそ半径700メートル以内の地域——なかでも国道246号より北側と山手線の西側のエリア——を指す (cf. 倉石編 2010)。

² 現代日本において「文化」という語は、「芸術・学術など、人間の精神の働きによってつくり出され、人間の生活を高めていくうえで価値をもつもの」「人間が生み出してきた有形無形の成果の総体」「人間の生活様式 (ライフスタイル)」などさまざまな意味で用いられている。本書では、あえて「文化」の語を、これらのいずれかの意味に限定することなく、ゆるやかに捉えておきたい。

³ ここでは、「編集」を「人間が外界から得た情報にもとづいて、何らかの価値や独自性をもつ情報を生み出し、外界に向けて発信する過程で、意識的・無意識的に行なっていること」と広く捉えておきたい (cf. 松岡 2006)。

⁴ 橋本の代表的な仕事として、「フリー・ソウル (Free Soul)」というコンピレーションCDのシリーズがあるが、音楽ライターの柴崎祐二は、この「フリー・ソウル」のシリーズについて次のように述べている。「私たちは皆、「Free Soul」以後のパラダイムにいる。何を大げさなことを、と思うかも知れないが、こればかりは確実にそうなのだ。音楽を楽しむにあたって、そこに聞こえているグルーヴや、ハーモニーの色彩、耳 (肌) 触りを、その楽曲なり作り手であるアーティストの「思想」や「本質」に先んじる存在として、自

携帯電話もまだ普及していない時代に、「インフルエンサー」となったのである。橋本とその仲間たちが発端となったフリー・ソウル・ムーヴメントは、日本のポピュラー音楽をめぐる歴史において、ファンが起点となって展開されたムーヴメントとして、おそらく最大規模のものであった。

さらに橋本は、「選曲家」としての自己を確立し、カフェブームや「カフェミュージック」ブームの先駆けにもなった（ただし、橋本は「ブーム」を仕掛けようとしていたわけではなかった）。そして、時代の荒波をこえて今日にいたるまで、編集者、選曲家、カフェ経営者だけでなく、DJ、文筆家、プロデューサーなど、多彩な活動を続けてきた。

これまでに橋本が選曲を手がけたコンピレーション CD は 350 枚を超え、1999 年に渋谷で開いたカフェは、25 年以上にわたって営業を続けている（渋谷で個人経営のカフェを続けることがどれだけ大変であるかは、想像に難くない⁵）。また橋本は、有線放送サービスを提供する USEN の「usen for Cafe Apres-midi」と「usen for Free Soul」というチャンネルや、アパレル企業のユナイテッドアローズが展開するグリーンレーベルリラクシングというブランドの BGM の監修も行なっている⁶。きっとあなたも日々の暮らしのなかで、橋本が関わった音楽を耳にしたことがあるに違いない。

新たな文化は「真空」から生まれることはない。そこには、かならず先行する文化が存在する。文化の創造において重要になるのが、先行する文化を編集する力である⁷。

分なりの星座盤とともに味わい、愛で、体を揺らすというありようは、現在では（どんなにエリート主義的なリスナーだとしても、あるいは、当然、どんなに「イージー」なリスナーだとしても）多くの音楽ファンが無意識的に共有するエートスとなっている」（柴崎 2024）。

⁵ 川口葉子は、2006 年から 2008 年にかけて、渋谷におけるカフェの歴史を跡づけた「川口葉子の渋谷カフェ考現学」というウェブ記事を連載し、そのなかでカフェ・アプレミディを「東京カフェの第一世代」と位置づけている（川口 2006-2008）。この連載記事には多くの個人経営カフェが登場するが、2025 年現在、すでに閉店しているカフェも少なくない。

⁶ 君塚洋一は、現代日本における店舗 BGM の展開において「usen for Cafe Apres-midi」の開設が「エポックメイキングとなる動き」（君塚 2018: 53）であったと指摘している。

⁷ ちなみに坂本龍一は、「作曲」という営みについて次のように述べている。「作曲の 95% は、過去の遺産を糧にしています。作曲家自身の“発明”は、せいぜい 1、2% 程度で、最大でも 5% といったところ。作曲の大部分は過去の作品の引用です。だから、音楽にかんする知識がなかったら、作曲なんかできるはずがない。言葉を知らなければ小説を書けない

私はこれから、橋本のライフヒストリー（人生史）をひもときながら、①彼の文化への嗜好や感性がどのように形作られたのか、②分厚い知識のデータベースがどのように構築されたのか、③そしてその類まれな編集力が、他者やモノや場所とかかわり、さまざまな出来事を直接・間接に経験するなかで、どのように生まれ、どのように発揮されたのかを詳らかにしたいと考えている。そこからは、膨大な情報があふれるデジタル時代における人間の編集力について改めて考える、多くのヒントを得ることができるにちがいない。

つづく

参考文献

- 川口葉子，2006-2008，「川口葉子の渋谷カフェ考現学」（2025年6月10日取得，<https://www.shibuyabunka.com/cafe.php?mode=archives>）.
- 君塚洋一，2018，『選曲の社会史——「洋楽かぶれ」の系譜』日本評論社.
- 倉石忠彦編，2010，『渋谷をくらす——渋谷民俗誌のこころみ』雄山閣.
- 坂本龍一，2015，「第3回 「音楽」について言いきる」（2025年6月10日取得，<https://openers.jp/lounge/4268>）.
- 柴崎祐二，2024，「30周年を迎えた Free Soul シリーズの「ベスト・オブ・ベスト」——橋本徹、インタビュー」（2025年6月10日取得，<https://www.eleking.net/interviews/011479/>）.
- 松岡正剛，2006，『17歳のための世界と日本の見方——セイゴオ先生の人間文化講義』春秋社.

のおなじです。ポーっとしているだけで何かがわいてくるということは幻想です。世界を大きく変えるほどの、たとえばバッハやドビュッシーなみの天才は、それこそ300年にひとり出るか出ないかというところでしょう。ビートルズの音楽だって、引用です。黒人音楽、ミュージカルやポピュラー系の音楽、ロックンロール、さまざまな要素がうまくミックスされている。それをキレイにスタイリングしたのが、プロデューサーのジョージ・マーティンだったということです。ぼくはビートルズには、オリジナリティよりも、豊かな蓄積をかんじます」（坂本 2015）